

ストップ 科学離れ

子どもの科学離れに歯止めをかけようと、鳴門教育大が徳島県内の小中学生を対象にした理数系教育に取り組んでいる。化学や数学、情報など高校、大学で学ぶ専門的な内容を継続的に教えて科学への関心を高め、科学者や技術者の養成につなげる。

鳴教大、小中学生に「講座」

「科学・技術者の発掘・養成講座」と題して同大を会場に1年間のプログラムで行われる。6月から3カ月間は数学や技術工学、生物、物理などの基礎講義が10〜12回あり、実験もある。9月からは子どもたちが関心のある分野を選び、同大の各担当教員らの研究室に所属して専門性を高める。主に土・日曜に行うほか、宿泊研修や親子科学実験、専門家による特別講義なども計画している。3月には研究成果の発表会を開く。

1年間のプログラム 本年度参加者を募集

始めた。子どもたちは宇宙物理学や遺伝子解析、プログラミングなど小中学校の学習指導要領に載っていない内容にも熱心に取り組み、34人が修了した。単発的な公開講座とは違い、継続したプログラムが好評という。コーディネーターを務める今倉康宏・同大名誉教授は「子どもの学びたいことをきちんと教え、限界を伸ばす教育が大切。日本の未来を担う科

研究者、技術者を育てたい」と話している。鳴教大は15年度と同講座の参加者を募集している。対象は小学5年から中学3年まで。定員は25人程度で、応募者が多い場合は書類審査などで選考する。締め切りは4月末。問い合わせは運営委員会〈電088(687)6408〉またはメール〈yainakura@nii.ac.jp〉。



研究発表会で、高度な化学反応などについて説明する小中学生＝3月、鳴門市の鳴門教育大(今倉名誉教授提供)

本年度の出前授業始まる



鳴教大付属中を皮切りに、



徳島新聞社の2015年度の出前授業が13日、徳島市の鳴門教育大付属中学校を皮切りに始まった。1〜3年生461人が情報収集のノウハウや発表の仕方などを学んだ。NIE推進室の三谷徹担当部長が取材を例に、略語を使ったメモの取り方やインタビューでの注意点などを学

iPS細胞でがん免疫治療

理研・千葉大 18年度までに

人工多能性幹細胞(iPS細胞)から作られた特殊な免疫細胞でがんを治療する臨床研究

かった。千葉大や厚生労働省の審査を経て、2018年度までに1例目の治療を始めた

iPS細胞を使ったがん免疫治療のイメージ



計画では、患者や第三者の血液からiPS細胞を作って増やした後、リンパ球の一種

「NKT細胞」に変化させ、がんの近くに投与する。NKT細胞は、他の免疫細胞を活性化

の決定だ」と評価。グループは、

するなどして、臨牀研究の喉などのがん治療が難しい後、肺がんを対象を広げるでは、がん患者T細胞を採取する免疫治療